

地球温暖化で産卵海域が減少

クロマグロ またまた打撃

地球温暖化が今のペースで進むと、今世紀末には太平洋のクロマグロの主要な産卵海域で産卵に適した場所が縮小したり北上したりして、マグロの生息に深刻な影響が出る可能性があるとの研究結果を東京大の木村伸吾教授（海洋環境学）らのグループが二十五日までにまとめた。

乱獲のため、ただでさえ厳しいクロマグロの資源状態が、温暖化によってさらに悪化することになりかねないという。

太平洋のクロマグロは東から西まで広い範囲を回遊しながら成長するが、産卵場所は台湾の東部から奄美大島周辺にかけての狭い海域にほぼ限られている。

研究グループは、温度を変えたクロマグロの稚魚の飼育実験を実施。この海域の平均水温に近い二六度がマグロの成長に最適の温度で、これより六度近く水温が低くなっても生存率は変わらないが、水温が三〇度近くになると、ほとんどが死んでしまう可能性が高い

東大グループ 今世紀末にも

ことが分かった。

次に、スーパーコンピュータ「地球シミュレータ」による今後の温暖化と海水温上昇の予測結果を基にマグロの産卵海域の温度変化を解析すると、二〇九九年には水温が二八度より低い産卵に適した海域の面積が縮小し、生き残る稚魚の数が現在の37%になってしまふことが分かった。

ただ、木村教授によると、このころには日本海にマグロの産卵に適した海域が形成され、ここがマグロの大きな産卵域になる可能

太平洋クロマグロ 三陸沖など日本近海で捕れるマグロで、高級トロやすしねたとして高値で取引される。大西洋のクロマグロと同種とされてきたが、近年の遺伝子解析では別種だとする見方も出ている。大部分は、春から初夏にかけ台湾沖などで産卵するが、日本海で産卵する個体群の存在も明らかになっている。日本の漁獲量が最も多いが、近年は蓄養マグロ向けのメキシコの漁獲量も増加。水産庁は、1990年代後半をピークに資源が減少傾向にあるとしている。

木村教授は「この場合、日本海でマグロの親魚の漁獲量が増える可能性がある一方、日本、中国、台湾、韓国などの間での魚資源の奪い合いが深刻化することも考えられる」と話している。



鳥取県の境港に水揚げされたクロマグロ